

## 教育部会自己点検・評価シート（様式1）

### 全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会会）

教育部会名：人間と社会

部会長名：廳 茂

作成者名：廳 茂

#### 概要（2000字）

「人間と社会」教育部会は、社会に関する広い視野と深い洞察力を身につけることを学習目標として、①人文・社会科学のディシプリン(社会学、文化人類学、地理学、社会思想史)、および②現代的諸課題(現代社会論、越境する文化、生活環境と技術、学校教育と社会)の双方を視野に入れ、多岐にわたる授業科目を提供している。

授業内容は、概ねシラバスに沿って展開されている。個々の教員は、資料配布、映像・音声資料等の活用、コミュニケーションカード等の活用、双方向的な意見紹介やコメント、高校の学習内容との連続性の確認、受講者の既存の知識や観点を相対化する問題提起等、多様な工夫・努力を行っている。映像を使える講義から理論的、そして純粋に思想的内容の講義までであるので、全ての授業が今日の学生の好みに全て適合しているわけではないが、その割には学生の評価も悪くはない。

教員の熱意を結実させ、学生の学習効果をさらに向上させる上で、つねに指摘されている3つの問題・障害がある。

第1は、クラスの規模である。他の全学共通科目と同様、1クラス200名を一応のめどとしているが、その上限に達している大人数クラスが複数存在する。「人間と社会」の受講者は近年着実に増加し、これに伴ってクラスの大規模化も進んでいる。教員の多くは、学生の理解を深めるための双方向的授業、授業時間以外の学修確保等を目指し、様々な努力をしているが、客観的なクラスサイズの大きさからみて、そうした努力にも限界がある。

第2の問題は、1年前期の「学部指定開講枠」である。これも全学共通科目・教養原論全体に関わる問題であるが、「人間と社会」のようにカバーすべき領域が広く、多岐にわたる科目では、受講学生の関心が学習意欲の水準に直結しやすい。現に、学生の授業評価は後期よりも前期の方が厳しい傾向にあるが、その主な理由は、①前期の方がクラスサイズが大きい上、②前期は学部指定開講枠があることに基づくと思われる。

第3の問題は、「専門基礎科目」の位置づけの不明確さである。現在、「人間と社会」に関しては、経済学部・経営学部の二学部だけが専門基礎科目と位置づけている。他学部は、文系のばあい一般に専門基礎科目は自学部内で実施している。しかも経済・経営学部の教員は、「人間と社会」の科目を担当していない。そこで、「人間と社会」に関わる専門基礎科目の実際の担当者は、すべて経済・経営学部以外の教員であり、自らの授業内容がどのような意味で経済学・経営学の「専門基礎」足り得るのか、十分に理解しえず、悩みながら授業を行っている。自学部の専門基礎教育を実施しながら、他学部(経済・経営)の学生のための専門基礎科目まで一方的に担っていることに伴う負担感と不当感はいままでのない。

今日の大学では、一種の専門学校化が著しく進んでおり、「教養」の意義づけがなされていない。とりわけ理論的、思想的学科を学生に教えることは、日々むつかしくなっている。「教養」科目をなぜ受けねばならないのかわからない、と直接授業の後に訴える学生も多い。神戸大学自体が、「教養」科目の意義と位置づけを建前上行っているだけであり、全学の教員がじつは関与しているわけではないというこの科目への大学の「不熱心さ」を学生は意外なほどよく知っている。しかしまさにこの「教養」の差が、文章力や思考力、大局的に物を考える力に直結しており、大学生の人間的な能力の

根幹をなすものである。制度的問題の整備も含めて、大学の實力と見識が問われている事柄である。

上記のような諸問題があるなか、＜人間と社会＞部会は比較的よく健闘している。この分野の学科としては授業も人気がある方であり、各スタッフもその工夫が限界に近づきつつあるとはいえ、様々のことを試みている。当面果たすべき課題は、ほぼ果たしていると判断される。

教育部会用自己点検・評価シート（様式1）

## 項目・観点ごとの記述

### 基準5 教育内容及び方法

5-1 【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上）

配慮している。全体として、「人間と社会」の学習目標を、抽象的な思想・理論から、具体的・経験的事例論まで、多様な学的手法・視点から追究している。近代科学のディシプリン（社会学、文化人類学、地理学、社会思想史）および現代的課題と具体的なグローバル・イシュー（社会学、文化人類学、地理学、現代社会論、越境する文化、生活環境と技術、学校教育と社会）の双方を視野に、「人間と社会」が担当すべき広範な領域をカバーしている。社会学、文化人類学、地理学は、この両方をできるようにスタッフの配置を考えている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、映像等教材、コミュニケーションペーパー

5-2 【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150字以上）

採用されている。授業方法は、授業内容の性格に応じて、映像やグラフ、ビデオ、さらに実験や小集団教育などを使用したものから、すべて講述からなるものまで多様である。授業レジュメと資料は、十分に用意されている。また、シラバスに沿ったレポート課題の設定と指導を行なう、レポートにおいて学生の興味関心のあることを選択させる、毎回、前回の授業内容の復習、再確認をするなど様々な工夫がなされている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、映像等教材、コミュニケーションペーパー

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>多人数クラスのため、行き届かない部分も多いが、可能である限り配慮されている。具体的には、それが可能なサイズの授業では、毎回授業に対するコメントを書かせて提出させ双方向的な要素を取り入れることに腐心したり、毎回課題を掲げ学生の自主自習を促したりするなどの工夫が行われている。</p>
<p>根拠資料</p> <p>シラバス、教科書、配布資料、コミュニケーションペーパー</p>

5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

<p>観点に係る状況（50字以上）</p> <p>作成され、活用されている。また、学生の反応や学習状況を授業終了時のコメントをつうじてその都度確認するなどの工夫がなされている。シラバスは、思想的、理論的科目の場合は、講義の性質上おのずと限界があるが、講義内容について概ねこまかく予告、解説されている。実際の講義も、学生の理解力が毎年必ずしも同じでなく、また、質問に割く時間配分などの問題もあるので、完全にということはあるが、ほぼシラバス通りに展開されている。</p>
<p>根拠資料</p> <p>シラバス</p>

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>多人数のクラスであるため、きめ細やかな配慮が行き届かない部分がどうしても多くなってしまいう状況にあることは否めない。しかし、そのような困難な状況のなかでも、基礎学力不足の学生への配慮は、可能な限り実施されている。とくに今日の学生がもっとも苦手とする思想系の講義では、復習や再講述、資料講読を繰り返すなどして、基礎的理解の習得に努めている。</p>
<p>根拠資料</p> <p>コミュニケーションペーパー、シラバス、配布資料</p>

**5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】**

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>成績評価基準についてはシラバスにおいて明示されている。そして、その基準に則った成績評価が適切に実施されている。また、成績評価基準を第一回の授業時に受講生に対し詳しく説明するなどの工夫も行われている。</p>
<p>根拠資料</p> <p>シラバス、教科書、配布資料、コミュニケーションペーパー</p>

5-3-③： 成績評価等の客観性，厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100字以上）

講じられている。前述したように、成績評価基準はシラバスにおいて詳しく明示されている。そして、成績評価は試験答案等にもとづき客観的かつ厳格になされており、また、シラバスに掲載された成績評価基準に則った評価がなされている。学生からの異議申し立ても、少ない方である。

根拠資料

試験答案

## 基準6 学習成果

6-1【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

観点に係る状況（100字以上）

多人数のクラスであるため、どうしても一定程度の限界があることは否めない。しかしながら、所与のきわめて厳しい環境のなかにおいても、ひとりひとりの教員の努力と創意工夫により、受講生の学習成果は上がっている。本大学の学生のポテンシャルの高さでもあろうが、試験の出来は悪くなく、きわめて優秀な答案を書けるまでになる人材も、つねに一定程度存在している。

根拠資料

試験答案、コミュニケーションペーパー、学生アンケート

## 基準7 施設・設備及び学生支援

7-1【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

十分に整備されていない。自主的学習を促進するには、少人数・双方向的授業の展開が必要だが、実際には多人数クラスが多く、その環境は整備されていない。もちろん所与の環境の中で、教員は自主的学習の促進に向け、努力している。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、コミュニケーションペーパー

7-2【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）

適切に実施されている。具体的には、第一回の授業時に詳細なガイダンスを実施する、ガイダンスの内容を記した資料を配布するなどの工夫をおこない、受講生に対し授業科目の詳細な内容が伝わるよう丁寧な説明がこころがけられている。

根拠資料

シラバス、第1回目の授業の配布資料

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

多人数クラスのため、行き届かない部分も多いが、可能な範囲で行われている。具体的には、アンケートによる質問を受け付け、授業時において回答する、設定したオフィスアワーを活用する、そのほか個別の支援の要望に対し柔軟に対応するなど、さまざまな工夫がなされている。授業後の様々の質問にも、時間が許すかぎり答えている。

根拠資料

シラバス、コミュニケーションペーパー、学生アンケート